

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第824号 平成26年10月24日

「新聞週間」に考える

毎年10月15日からの1週間は、「新聞週間」で、例年通り、全国で読者を対象とした様々なイベントが開催されたところです。

ところで、ある年の新聞週間に採用された標語に「新聞で 汚れた国の 大掃除」（井上ひさし著「日本語教室」から）というのがあります。

この標語は誠に傑作ですが、しかし、良く見ると実に可笑しいと思います。もし、皆さんが、この標語を見て、たちどころにその可笑しさに気付いたとすれば、柔軟で鋭い感性の持ち主とって良いと思います。

朝日新聞の誤報問題が国内外を揺るがし、更に産経新聞前ソウル支局長が韓国の朴大統領の名誉を毀損したとして在宅起訴されるという事態が生じている中で、今年の「新聞週間」は、マスコミはもとより、新聞の読者である国民にとっても、非常に重たいものとなりました。

新聞には、「社会の木鐸」としての使命があるといわれています。

この「社会の木鐸」というのは、「社会の人々を目覚めさせ、教え導く」という意味ですが、この言葉を新聞に関わっている方々は、どのように感じているのでしょうか。

新聞は、今日においても広く大衆に読まれており、その意味で社会に与える影響が非常に大きいことは否定できません。しかし、その事と、新聞が「社会の木鐸」であるかどうかとは別の問題で、朝日新聞の誤報問題はその事を良く示しています。

さて、私達は、日々膨大な情報に接し、様々な出来事に遭遇しています。そして、それらをどう感じ評価するかは、人によって随分と違いますが、それは、それぞれの経験や得ている情報の質や量が違うからです。逆に、キャリアの違う100人が100人とも、何があっても型にはまったように同じ判断をするとすれば、その方が異常だと思います。

ただ、私達が得ている情報、あるいは、私達に向けて発信される情報は常に正しいとは限りませんし、意図的に間違った情報が流される場合もあります。ですから、ある特定の情報だけに寄りかかって判断するというのは、非常に危険です。

オレオレ詐欺等お年寄りを狙った悪質な詐欺事件は後を絶ちませんが、そうした詐欺の被害者に対して「あんな詐欺に引っかかるなんて、なんてバカなんだ」という人がいますが、私は、ある限られた情報の中で判断を迫られると誰にでも起こり

得る事だと思っています。電話越しに「オレオレ」といわれた時に、「息子に、本当に自分に電話したのかどうか確かめれば騙されずに済んだはずだ」というのはその通りです。しかし、事の大小はともかく、「思い込み」や「思い込まされ」という事は誰にでも起こり得るという事を忘れてはなりません。

朝日新聞の吉田調書に関する報道を見て、「福島第一原発の事故現場にいた東京電力社員が、吉田所長の命令に反して現場から避難してしまったのはけしからん」と思った人は少なくないはずです。私も、そう思ったし、内心「東京電力の社員ならやりかねない」とさえ感じていました。

吉田調書の問題に関しては、他紙が朝日新聞の記事を否定し、また、朝日新聞も誤報を認めた事によって現場にいた東京電力社員の名誉は回復されましたが、世の中には、誤った情報が流され、人知れず被害を被っている人がいるはずです。

私達が、間違った情報や意図的に流される事実と異なる情報に惑わされず、出来る限り正しい情報に近付くためには、より多くの情報に接すると共に、その中からより正しい情報を選び分けていく努力と力が必要になってきます。それは簡単な事ではありませんが、一人ひとりが、その努力を怠り、自ら判断せず、物いわぬ集団に成り果ててしまつては、日本の将来は暗いものになってしまいます。

さて、冒頭紹介した標語に話を戻しましょう。

「新聞で 汚れた国の 大掃除」という標語には句読点がありませんので、句読点を付けて読むところになります。

「新聞で、汚れた国の大掃除」

この標語が「新聞週間」の標語として成り立っているのは、新聞が社会正義を貫く力であるという前提があり、「社会の木鐸」であると多くの人々が感じている（あるいは、そう思い込んでいる）からだろうと思います。

しかし、公益財団法人の新聞通信調査会が8月から9月にかけて行ったメディアに関する全国世論調査の結果によると、新聞の信頼感が低くなったと答えた人は、朝日新聞の誤報問題もあり、昨年の5.6%から10.2%とほぼ倍増しています（10月19日付北海道新聞から）。

正確で公正な報道こそ新聞の命である事を、関係者は改めて肝に銘ずべきであり、くれぐれも、「新聞で汚れた国の、大掃除」とはならぬように願いたいものです。

（塾頭：吉田 洋一）